



TITLE:

# カラムが切り取った世界：写真が語る東南アジア・ムスリムの世界観

AUTHOR(S):

坪井, 祐司

---

CITATION:

坪井, 祐司. カラムが切り取った世界：写真が語る東南アジア・ムスリムの世界観. CIAS discussion paper No.40: 「カラム」の時代Ⅴ--近代マレー・ムスリムの日常生活 2014, 40: 9-18

ISSUE DATE:

2014-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/228612>

RIGHT:

© Center for Integrated Area Studies (CIAS), Kyoto University

# カラムが切り取った世界

## 写真が語る東南アジア・ムスリムの世界観

坪井 祐司

### はじめに

本論では、1950年代初頭に『カラム』誌に掲載された写真に焦点をあて、創刊当初の同誌の世界観を明らかにすることを試みる。

『カラム』の一つの特徴は、写真を多く掲載したことである。当時、多色刷りで写真をふんだんに使用した大衆紙が増えた。『カラム』を出版したカラム出版社(Qalam Press)は、ほかに『フィルム(Film)』、『アネカ・ワルナ(Aneka Warna)』など娯楽色の強い雑誌も発行していた[Hamed 2013: 58]。『カラム』は政治や宗教の色彩が強かったが、そこでも多くの写真が使用された。

『カラム』には毎号表紙に大きな写真が掲載されたのに加えて、写真の紹介をメインとするコーナーが4ページ前後設けられていた。CIASの『カラム』雑誌記事データベースで「写真(gambar)」で検索すると、写真をメインとする記事・見出しが20年間で697件あることがわかる<sup>1)</sup>。さらに、文章記事の中に小さな写真が含まれていることも多く、毎号20～30点の写真が掲載されていた。この時期、戦後のマレー語の新聞・雑誌の発行は一つのピークを迎え、中身も多彩なものとなった。

本論は、試論として1950～52年(第1号～第29号)における『カラム』に掲載された写真をとりあげ、記事の論調と関連付けながらその特徴を明らかにする。『カラム』は政治経済から宗教、文化まで多様な記事を含んでいるが、写真が威力を発揮するのは同時代における国際的なニュース記事である。1950～52年に「写真」で検索される記事88点をみると、写真が撮影された地域は多岐にわたっている(表1)。『カラム』の写真を概観することで、編集者がどのような世界を切り取り、どのようなイメージを発信していたのかを考えてみたい。

本論では、『カラム』に掲載された写真を地域ごとに

表1 地域別の『カラム』写真記事の点数(1950～52年)<sup>2)</sup>

インドネシア	34	シンガポール	7
パキスタン	13	朝鮮	5
エジプト	10	アメリカ	3
マラヤ	8	ベトナム	2

出典:CIAS『カラム』データベース

概観する。第一節では東アジア、第二節ではイスラム世界、第三節ではアメリカに関して、それぞれの写真の特徴と編集部の視角を読み解く。第四節では、『カラム』の大きな特色と思われる女性の写真をとりあげ、同誌の発行が開始された1950年代初頭の時代的特徴とシンガポールにおけるイスラム知識人たちの世界観を考察する。

### 1. 東アジア:アジアにおける戦争の時代

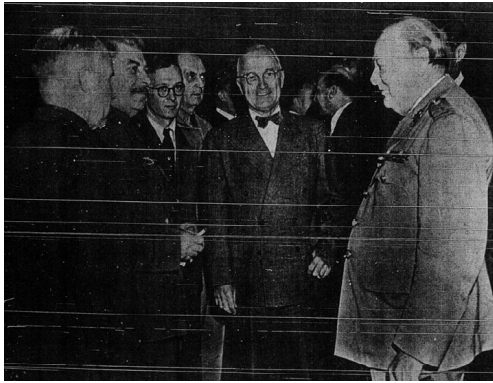
非イスラム圏のアジア地域、東アジアおよび大陸部東南アジアでとりあげられたのは朝鮮とベトナムであった。これは、両地域の脱植民地化の過程で大国が介入する戦争が勃発し、国際政治の焦点となったためである。『カラム』が発刊された1950年は、第二次世界大戦の記憶が冷めやらぬなか、東西冷戦に突入した時代であった。ただし、アジアにおいては冷戦ではなく実際に戦争が起こっており、その写真が数多く報道された。

創刊号(1950年7/8月)には第二次世界大戦に関する記事があり、1940年にイギリス軍がダンケルクから撤退したときの写真が掲載されている[Qalam 1950.7/8:15]。第8号(1951年3月)の表紙では、USIS<sup>3)</sup>の提供として、1945年のポツダム会談(スターリン、ルーズベルト、チャーチル)の写真が掲載された(写真①)。彼らの話し合いによって決定された連合国によ

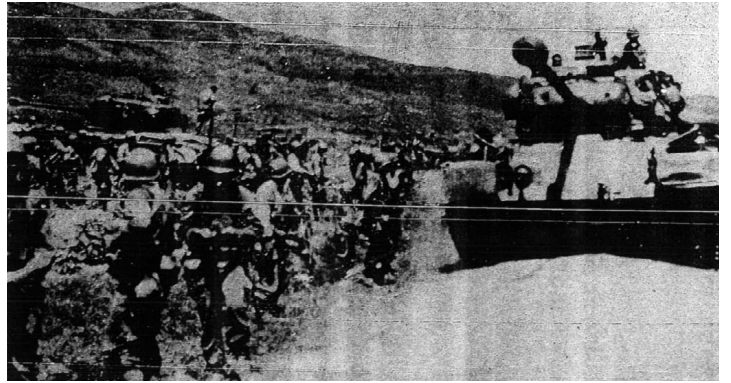
2) 写真の撮影地(被写体ではない)ごとに分類したもの。このほかに1点のみの地域が6か所(サウジアラビア、フィリピン、イラン、トルコ、チュニジア、レバノン)ある。

3) アメリカの情報宣伝を担当したUnited States Information Serviceを指すと思われる。

1) [http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta\\_pub/G0000003QALAM](http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000003QALAM)



写真①



写真②

る第二次大戦の戦後処理が混乱をもたらしたという解説がつけられている[*Qalam* 1951.3: 1]。

『カラム』が創刊された1950年に始まった朝鮮戦争には大きな関心が示された。創刊号では朝鮮の歴史と現在の戦争を地図つきで解説する記事が掲載された。アメリカのAP通信の写真として、アメリカ軍の兵士や司令官マッカーサーなどが掲載されており、説明では北朝鮮軍がロシア戦車を使用していると述べている[*Qalam* 1950.7/8: 18-21]。朝鮮戦争の写真は1951年2月の7号まで連続的に掲載され、戦闘中のアメリカ軍や戦車、飛行機などの兵器、避難する民間人など、生々しい写真が多く掲載された(写真②)。第5号(1950年12月)にはアメリカ大統領トルーマンに関する記事が掲載されるとともにトルーマンとマッカーサーが会談した際の写真に掲載し、「この会談が極東におけるアメリカの方針を話し合うものだったため、世界中の注目を集めた」と紹介した[*Qalam* 1950.12: 23]。第7号では、中国軍の攻撃を受けるアメリカ軍の写真を掲載し、「朝鮮戦争は第三次世界大戦となるのか? とみんな茫然としている。和平に関する協議がまだなされていないため、このような考えに至るのだ」と書いている[*Qalam* 1951.2: 26]。

同時期に行われていたのが第一次インドシナ戦争である。第7号では「共産中国が南のインドシナへと侵攻(Komunist China merempuh ke selatan ke Indochina)」と題して、フランス軍の写真とともに、サイゴンの中国領事が捕虜を監視するフランス軍人と会話する写真を掲載し、「ホーチミン軍ではバオダイ(Bao Dai)<sup>4)</sup>・フランス軍に対抗できないため、共産軍が

援軍として南下している」と解説した[*Qalam* 1951.2: 23]。第18号(1952年1月)では、「マラヤと同様インドシナの状況も平和が破れて混乱している」として、共産党の武装蜂起により非常事態が宣告され、軍が強大な権限を握ったマラヤと対比して描いた[*Qalam* 1952.1: 20-21]。

朝鮮、ベトナムの事例における『カラム』の報道および写真は、どちらかといえばアメリカ、フランスの当局側になったものであった。その根底にあったのは、宗教を否定する共産主義への警戒感と思われる。このため、朝鮮やベトナムの民族解放への共感を示すことはなく、むしろ冷戦体制下の西側からの視点で二つの戦争をとらえていた。

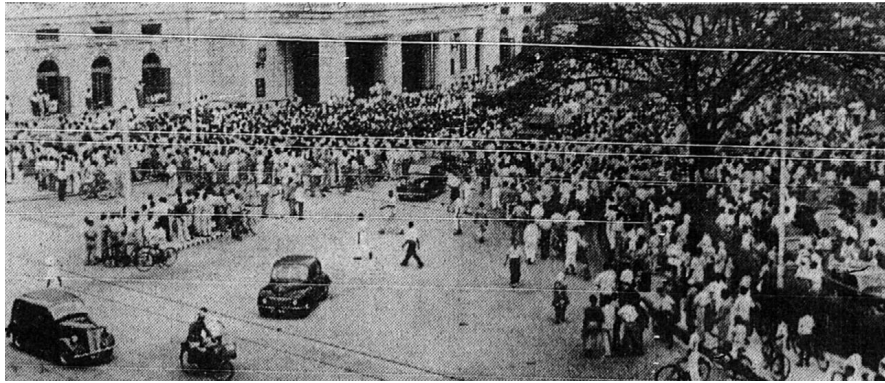
## 2. イスラム世界——脱植民地化・国民国家建設のなかのイスラム勢力

『カラム』が掲載した写真の圧倒的多数は島嶼部東南アジアから南アジア、西アジア、北アフリカまで広がるイスラム世界のものであった。『カラム』の時代、この地域の共通課題は脱植民地化、国民国家建設であった。すでに独立していた国から独立を目指す地域まで状況は多様であったが、ヨーロッパ勢力および世俗的な国家建設を行おうとする勢力にイスラム勢力が対抗し、『カラム』が後者の立場から報道するという構図は共通していた。

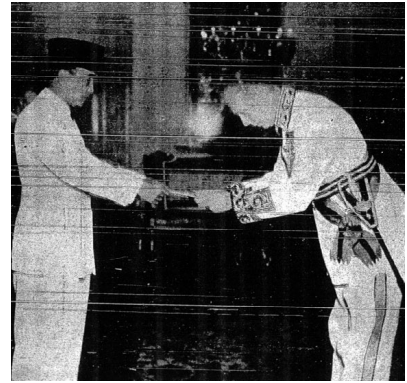
『カラム』の出版地シンガポールはインド洋を中心とするムスリムの移民の結節点であり、編集者エドルスはアラブ系であった。このため、『カラム』はイスラム勢力の統合を目指す動きに敏感であった。多くの地域から代表が集まってイスラムの結束を確認する会議がたびたび報道されたが、そこでは参加国を明記したボード等をもった参加者たちの写真が掲載され、イスラム世界の広がりが示された。第9号(1951年4月)に

4) バオダイ(1913-1997)はフランスの保護国として植民地化されたベトナム・阮朝の第13代の皇帝であった。第二次世界大戦後のホーチミンによる八月革命、ベトナム民主共和国の成立過程で退位に追い込まれたが、1949年にフランスの支援により建国されたベトナム国の元首となった。





写真③



写真④

はカラチのイスラム学者会議(Persidangan al-alam al-Islami)にパレスチナ、パキスタン、トルコなど各国代表が集まった写真が掲載され[*Qalam* 1951.4: 20]、第21号(1952年4月)では同じくカラチで行われた世界ウラマ大会(Muktamar ulama Islam sedunia)の様子が報道されている[*Qalam* 1952.4: 20-21]。

#### ●東南アジア

以下、地域ごとに写真をみていきたい。東南アジアのイスラム圏は『カラム』にとって地元であった。『カラム』はマラヤを「祖国(tanah air)」とみなしていたが、マラヤ・シンガポールに関しては、記事は多いものの写真はそれほど多く掲載されていない。地元の報道写真に関しては月刊誌である『カラム』は速報性が低かったためであろう。

そのなかで、『カラム』創刊当初のシンガポールにおいて大きな話題となったのは、ナドラという少女の改宗・結婚をめぐる事件である。シンガポールの裁判所がナドラのキリスト教からイスラム教への改宗およびムスリム男性との結婚を認めず、判決に不満を覚えたシンガポールのムスリムの抗議行動を当局が鎮圧し、18名の死者が出た(1950年12月)<sup>5)</sup>。『カラム』は第2号(1950年9月)でこの問題の展開を詳しく報じ、ナドラと養母の写真を掲載した[*Qalam* 1950.9: 29]。第6号(1951年1月)では、「ナドラのために！ 不満が引き起こした暴動(Keranamu Nadrah! Rusuhan Berbangkit Kerana Tak Puashati)」という写真記事が掲載された。そこでは、イスラム旗を掲げて裁判所

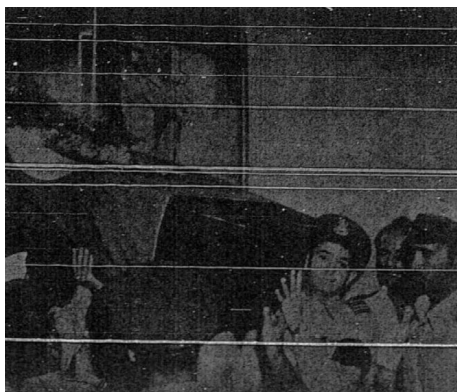
を取り囲む群衆や、警察、軍隊により検問を受けるムスリムの写真が掲載され、イギリスが動員したグルカ兵が怒りを買ったと述べられている[*Qalam* 1951.1: 22-23](写真③)。

一方で、隣国のインドネシアは、表1からもわかるとおり、最も写真が多く掲載された。毎号のように写真記事が掲載され、政治情勢が逐一報道されている。第2号では、8月15日のインドネシア連邦共和国の閣議の写真が掲載され、統一国家の形成が合意されたことが報じられた[*Qalam* 1950.9: 24]<sup>6)</sup>。写真はシンガポールのインドネシア共和国情報局と記されており、スカルノ政権から直接提供されていたことがわかる。第4号(1950年11月)の表紙には、10月にオランダの高等弁務官がスカルノ大統領に主権移譲に関する書面を手渡しているAP通信の写真が掲載された(写真④)。説明では「オランダ人はスカルノ大統領に頭を下げて敬意を表せざるを得なかった」と書かれた。「オランダ植民地期には同じ場所でインドネシアの有力者たちがオランダの総督に頭を下げていた」ことと対比して、時代の移り変わりを象徴させたのである[*Qalam* 1950.11: 2]。同号には記事とは関係なく同国人女性と一緒にいるオランダ兵の写真が掲載され、「オランダの兵士たちは帰国前にやることもなく、暇をつぶしている」という解説が付けられた[*Qalam* 1950.11: 32]。

その後もスカルノの写真は毎号のように『カラム』に登場しており、当時のマレー・インドネシア地域のムスリムにとって建国の英雄であったことがわかる。ただし、『カラム』が全面的にスカルノを支持していたわけではなかった。『カラム』はイスラム団体の連合

5) ナドラ(マリア)はオランダ領東インドでオランダ人両親に生まれ、第二次世界大戦中マレー人女性に引き取られてマラヤにやってきた。戦後オランダに戻った両親はマレー人養母にナドラの引き渡しを求め、シンガポールにて裁判となった。裁判中ナドラはムスリム男性との結婚を発表したが、裁判所はオランダ人両親側の主張を認め、ナドラの改宗・結婚を認めなかった。この件に関する『カラム』の報道については、[坪井 2011]を参照。

6) インドネシアは、オランダとの独立戦争を経て、スカルノのインドネシア共和国と15の地方国家からなるインドネシア連邦共和国が成立し、オランダから主権が移譲された(1949年12月)。しかし、インドネシア共和国が地方国家を吸収する形で翌50年8月に単一のインドネシア共和国が成立した。



写真⑤

により結成されたマシュミ党(Masyumi)<sup>7)</sup>を支援していた。第5号においてはマシュミ党の勢力拡大が報道され、同党の指導者講習会にインドネシア全土の60地域から代表が出席したときの集合写真や支部の集合写真などが掲載された。そこでは同党が全国に支部を持ち、イスラムに基づくインドネシア統治を目指す政策を持っていると解説がつけられた[*Qalam*1950.12: 15-20]。第27号(1952年10月)には、マシュミ党のジャカルタ本部で女性たちに囲まれるスカルノ大統領の写真が掲載されている[*Qalam* 1952.10: 41]。当初スカルノを支えていたマシュミ党だが、イスラム国家建設を否定したスカルノとの関係は悪化し、『カラム』もスカルノに対して徐々に批判に転じていくことになった<sup>8)</sup>。

### ●南アジア

パキスタンの写真はインドネシアに次いで多かった。インド・ムスリムが影響力を持っていたシンガポールにおいて、1947年にインドからムスリム地域が分離する形で独立したパキスタンの情勢は関心を集めた。当時の大きなニュースはリヤーカト・アリー・ハーン首相(Liaquat Ali Khan)<sup>9)</sup>が1951年10月に暗殺されたことであった。『カラム』では、第16号(1951年11月)で「世界を驚かせた恐ろしい暗殺(Perbunuhan yang dahsyat memeranjatkan dunia)」として、パキ

スタン政府情報局から提供されたラワールピンディにおける現場写真やカラチにおける葬列が掲載されている(写真⑤)[*Qalam* 1951.11: 19-20]。翌17号(1951年12月)ではハムカ(HAMKA)<sup>10)</sup>による追悼記事とともに葬儀の写真が掲載された[*Qalam* 1951.12: 15-16]。もう一つはインドとの国境紛争であるカシミール問題である。16、17号では、ムスリム(パキスタン)側からみたカシミールの歴史や紛争についての記事が掲載され、パキスタン軍の聖戦士(Mujahiddin)や悲しみにくれるカシミールの女性の写真が掲載されている[*Qalam* 1951.11: 5, 1951.12: 37]。

### ●西アジア

西アジアでとりあげられることが多かったのは、東南アジアとの人的交流も深く、イスラム思想の中心でもあったエジプトである。エジプトはすでに独立国家であったが、『カラム』は以下の二点に注目した。一つ目は世俗的な政権に対抗するイスラム勢力の動向である。第14号(1951年9月)ではムスリム同胞団の勢力拡大についての記事が掲載され、首脳陣や本部の写真が掲載された[*Qalam* 1951.9: 27-28]<sup>11)</sup>。第二はエジプト国内に残ったヨーロッパの経済権益を回収する動きである。第17号では「エジプトが新たな問題を起こす(Mesir membuat masalah baharu)」として、スエズ運河からの撤退要求に対してイギリスが派遣した軍艦の写真が掲載され[*Qalam* 1951.12: 19]、翌18号(1952年1月)にはスエズ運河の歴史が地図やレセップス、グラッドストーンの肖像などとともに描かれた[*Qalam* 1952.1: 26]。第22号(1952年5月)には、イギリス資本のバークレイズ銀行が放火された写真がみられる[*Qalam* 1952.5: 6]<sup>12)</sup>。

イスラム勢力対世俗派・欧米という図式は他地域でもみられた動きである。世俗派対イスラム派という国内の政治対立でとりあげられたのはトルコであった。

7) マシュミ(インドネシアムスリム評議会 Majelis Syuro Muslimin Indonesia)は1943年日本軍政のもとで結成されたムハンマディア(Muhammadiyah)、ナフダトゥル・ウラマ(Nakhdatul Ulama, NU)などイスラム団体の連合体であった。独立後は国内最大規模の政党へと発展したが、1952年にNUが脱退して分裂し、55年の総選挙では第2党にとどまった。スカルノは1960年、西スマトラの武装蜂起に加担者を出したという理由でマシュミを非法化した。

8) 1950年代後半の『カラム』のインドネシアへの評価については[坪井 2013: 25]を参照。

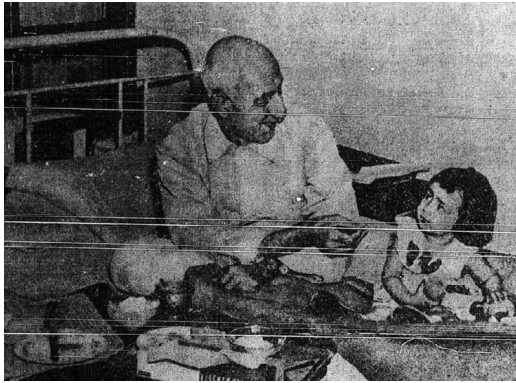
9) リヤーカト・アリー・ハーン(1895-1951)は英領インドにムスリム連盟に加わり、パキスタンの分離独立を指導してジンナー総督のもとで初代首相に就任した。

10) ハムカ(本名アブドゥルマリク・カリム・アムルッラー Abdul Malik Karim Amrullah, 1908-1981)はインドネシアのイスラム改革主義を主導したウラマ・著述家である。『カラム』の寄稿者の一人でもあり、CIASデータベースからは14件の記事が検索できる。

11) 『カラム』の主筆エドルス(Edrus)は1956年に同誌上でムスリム同胞団の結成を宣言する[山本 2002: 263]。

12) 地中海と紅海(インド洋)をつなぐスエズ運河は1869年フランス人レセップスの主導により開削された。イギリスは1875年に運河を買収すると、アラビー運動を契機にグラッドストーン政権が軍事介入して運河を支配下に置いた(1882年)。第二次世界大戦後もイギリス軍の駐留が続いたため、1951年エジプト政府は軍の撤退を要求、52年1月には反外国人暴動がおこった。第17号、18号はこの経緯を報道したものである。





写真⑥



写真⑦

第12号(1952年1月)では「再びイスラム化するトルコ(Turki diislamkan semula)」として、1950年の総選挙の結果を受けて民主党のジェラル・バヤル(Celal Bayar)政権が誕生したことにより<sup>13)</sup>、ケマル・アタチュルク以来の世俗主義が転換されてイスラム色が強まるという観測記事が掲載され、モスクで祈りをささげるトルコのムスリムの写真が掲載された[*Qalam* 1952.1: 12-13]。トルコの世俗化政策は『カラム』の批判の対象であった。第24号(1952年7月)には、「イスラム国であったトルコはケマル・アタチュルクの時代に西洋文化にとってかわられてしまった」として、海岸で海水浴をするトルコ人の写真が掲載された。次のページには「モスクにはアラビア文字が描かれ、真のイスラム芸術がみてとれる」としてモスクの写真が載せられた[*Qalam* 1952.7: 23-24]。同じ号にはオスマン朝によるコンスタンティノープルの占領の記事が掲載されたが、そこではイスタンブールやボスフォラス海峡の写真にくわえて洋装するトルコ人の写真があった。「トルコ人は自民族の家を出て西洋的な服装をしている。ケマル・アタチュルクによりトルコ人の間には西洋文化が浸透した。我々もこれに倣うのか?」と疑問を投げかけたのであった[*Qalam* 1952.7: 54-59]。

欧米との経済権益をめぐる対立に関しては、イランの例がある。第17号は、石油の国有化政策を行ったイランのモサッデグ(Mohamed Mosaddegh)首相<sup>14)</sup>を「寝室から国政を指揮する人物」として紹介している。寝室で親戚の娘と遊ぶモサッデグの写真が掲載され、

「病気のためいつも寝室にいるが、イラン国民は彼が石油を自民族のものとするという世界を揺るがす難しい問題を解決することに全幅の信頼を寄せている」という解説がついている(写真⑥)[*Qalam* 1951.12: 17]。

#### ●北アフリカ

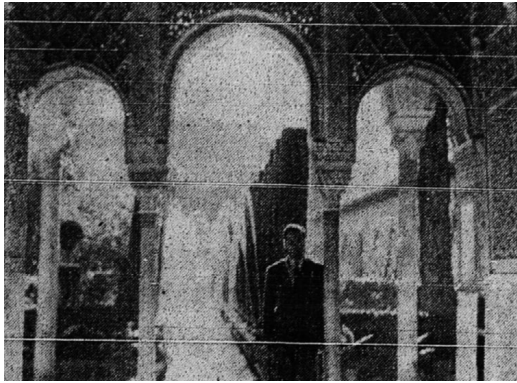
北アフリカでは、いずれもフランスの植民地であったモロッコ、チュニジアの独立運動が取りあげられた。第11号(1951年6月)では「モロッコが世界の注目の的に(Maghribi al-aqsa menjadi tumpuan perhatian dunia)」と題する記事でモロッコのフランスに対する独立運動が取り上げられ、モロッコ軍やラバト市街の写真が掲載された[*Qalam* 1951.6: 12-14]。第22号には「チュニジアがフランス権力的手中に(Tunisia terletak di bawah telunjuk kekuasaan Perancis)」という記事のなかでチュニジア人を逮捕するフランス兵の写真が掲載され、同じ号に「チュニスの女性は家を出て独立のため戦う(Kaum ibu di Tunisia keluar memperjuangkan kemerdekaannya)」という政治活動に参加する女性たちをとりあげた写真記事が掲載された(写真⑦)[*Qalam* 1952.5: 5, 22]。

#### ●マイノリティとしてのムスリム

共産圏において迫害されるマイノリティとしてのムスリムに関する記事も見られた。第13号(1951年8月)には、ソ連領のトルキスタンにおけるムスリム指導者が「祖国を占領し、イスラムの平和を脅かす共産ロシアを倒すことを神に祈る」写真が掲載された[*Qalam* 1951.8: 7]。第26号(1952年9月)では、「共産主義者の迫害からの逃走(Melarikan diri daripada kezaliman komunis)」として、中国から共産党政権の迫害をのがれインド・ボンベイにやってきたムスリムの写真が掲載された[*Qalam* 1952.9: 44]。第18号にお

13) バヤル(1883-1986)はムスタファ・ケマル政権の閣僚として活躍し、第二次大戦後に結成した民主党で1950年の総選挙を勝利し第3代大統領に就任した。ただし、民主党政権は親米的であり、世俗主義の原則もやや緩和されたのみであった。1960年に軍のクーデタがおこりバヤルは大統領を解職された。

14) モサッデグ(1882-1967)は1951年にイラン首相に就任し、イギリス資本所有の石油権益を国有化したが、53年に英米の支持を受けた軍部のクーデタにより失脚した。



写真⑧



写真⑨

いては、USIS提供のブルガリアからトルコに逃げたムスリムの写真が紹介された。「ブルガリアのムスリムは共産党政権の国では保護されず、生活できないためトルコ領へと入ってきた」という解説がつけられている[*Qalam* 1952.1: 19]。

『カラム』はムスリムがマイノリティである地域も含めてイスラム世界に幅広く目配りしていた。当時ほどの地域でも脱植民地化と国民国家の建設が進行中であり、ヨーロッパからの政治的独立や経済的な権益の回復が共通の課題であった。『カラム』に掲載された写真からもイスラム勢力からみた政治的課題の共通性がうかがえる。

#### ● 景観としてのイスラム世界

『カラム』の国際記事は政治に関するものが多かったが、そこでは政治指導者だけでなくその地域の景観を示す写真も掲載され、ムスリムたちにイスラム世界の広がりや想像させる材料を提供した。第23号(1952年6月)では、ザアバ(Za' ba)<sup>15)</sup>によるイスラムに関する記事の中で、内容とは直接関係がないにもかかわらず、スペインのイスラム建築の写真が「イスラムの過去の栄光の証」として掲載された(写真⑧)。その直後には、南アフリカの「マレー人」<sup>16)</sup>の写真が紹介されている[*Qalam* 1952.6: 24, 26]。

また、各地の情勢を紹介する記事にあわせて自然の景観を映した写真が掲載された例も多い。第8号でエジプトが取り上げられた際には綿花栽培する農民の

写真が紹介された(写真⑨)。「ナイル川沿いの綿花産業はエジプトで富裕層を生み出している」として、低賃金労働が経済格差を生んでいると主張されている[*Qalam* 1951.3: 29]。このほかにも、第16号でカシミール問題に言及する際には冒頭のページにカシミールの山岳地帯の風景が映し出され[*Qalam* 1951.11: 4]、第13号のマレー語に関する記事のなかでは、ジャワの美しく豊かな風景として棚田が紹介されている[*Qalam* 1951.8: 14]。これらの多様な景観はイスラム世界の広さをアピールするものであったといえよう。

### 3. 「近代」の象徴としてのアメリカ

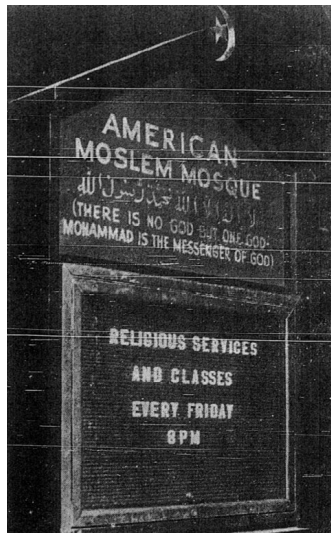
意外なことに『カラム』はアメリカの写真を多く含んでいた。『カラム』の寄稿者のなかにアフマド・フセイン(Ahmad Husein)というアメリカ・ニューヨーク在住者がいたため、彼が提供したものと思われる。彼は第15号(1951年10月)のニューヨークに関する記事の中で摩天楼の写真を紹介し、第24号の記事は余暇を楽しむニューヨーク市民の写真を伴っていた[*Qalam* 1951.10: 16-17, 1952.7: 13-15]。また、ニューヨークにおけるモスクやムスリムの活動も紹介されている(写真⑩)[*Qalam* 1952.12: 26]。

『カラム』に集った知識人にとって、近代を象徴していたのは宗主国のイギリスではなくアメリカであった。それは、アメリカが当時超大国として西側陣営を指導していたからにはほかならない。第12号では、記事とは無関係のニューヨークに凱旋するマッカーサーの写真が掲載され、「英雄となり民族に貢献すれば誉めそやされ、感謝され、逆に民族を裏切れば貶められ、時には殺されるのが世の習い。マッカーサーがニューヨークに到着した際、アメリカ人から祖国の英雄とみられ700万人に迎えられた」と報じた(写真⑪)[*Qalam*

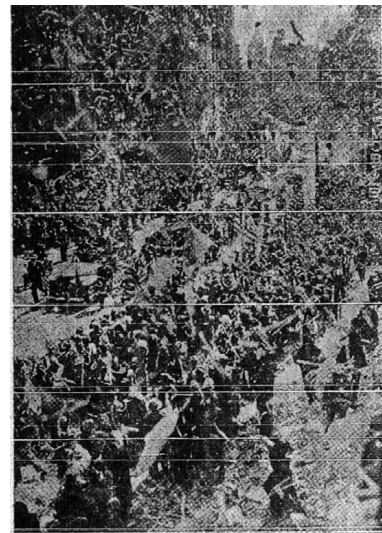
15) ザアバ(本名ザイナルアビディン・アフマド Zainal Abidin Ahmad, 1895-1973)は近代言語としてのマレー(マレーシア)語の体系化に尽力した文学・言語学者である。『カラム』の常連寄稿者であり、CIASのデータベースからは50件の記事が検索できる。

16) 南アフリカの喜望峰(ケープ植民地)にはオランダ東インド会社の流刑地があり、ジャワなど東南アジアから送られたケープマレー人と呼ばれる人々が存在した。





写真⑩



写真⑪



写真⑫

1951.7: 54-55]。

近代技術の最高峰としてのアメリカも紹介された。第8号では「自動車産業の発展 (Kemajuan perusahaan motokar)」として自動車の発展の歴史を紹介し、フォードやゼネラルモーターズの車の写真を掲載しながら沿革を説明した [Qalam 1951.3: 36-38]。同号には、マラヤの農業局の助手がアメリカを訪問している写真も掲載されている。彼らはアメリカの技術援助により1年間訪問中であり、畜産業において卵に試薬を入れて病原菌の検査をしていると解説がつけられた [Qalam 1951.3: 31]。

アメリカが生み出した大衆文化にも『カラム』は好奇の眼を向けている。第3号(1950年10月)では、暗く

で判読しがたいがアメリカの女子プロレスと思われる写真が掲載された。そして、「これはなんだ！ 進歩的なアメリカ人の女性がレスリングをしている。これは「進歩」のひとつだ。我々にもすでに女子のホッケーチームやバドミントンの選手がいる。我々はさらなる進歩のために女子レスリングをもとう」と書かれている [Qalam 1950.10: 37]。当時のアメリカは、様々な面で東南アジアのムスリムが持たないものを持っているのである。

#### 4. 『カラム』の女性像

『カラム』の記事・写真の特徴の一つは女性が多く登場することである。冒頭で述べたように、この時期の大衆的なマレー語雑誌には映画女優などの写真が多く掲載されていた。『カラム』は、それらと路線は異なるものの、報道写真ばかりでなく多様な写真を含んでいた。それとともに、女性の社会進出は第二次世界大戦後の時代性を象徴するものといえよう。本節では、『カラム』がマレー・イスラム社会における女性をどのように報じたかを概観したい。

創刊号の表紙を飾ったのはスカルノ夫人のファトマワティ (Fatmawati) であった。彼女は「近代的な世界に生きているにもかかわらず、トドゥン (ベール) を脱いだことはない」として、近代とイスラムを両立する女性として紹介され、「マラヤの女性たちのなかでインドネシアで最も有名な女性でもトゥドゥンを尊重している例」として紹介されている (写真⑫) [Qalam 1950.7-8: 2]。



さらに、創刊号には「プレゼント写真(gambar hadiah)」として、当時のマレー世界で著名な女優であったカスマ・ブーティ(Kasmah Booty)がつけられていた[*Qalam* 1950.7-8: 2]。この付録写真はどのような形態であったかは不明だが、第4号ではUMNO総裁ダト・オン(Dato Onn)の家族の写真がつけられるなど、これ以降もしばしばみられる[*Qalam* 1950.11: 2]。当時の雑誌は、多くが販売促進のための付録を付けていた[Hemedi 2013: 221]。写真は読者を引き付けるための有力な武器だったのである。

海外の王妃や有力者の夫人などが紹介される例も多数みられた。第8号にはイラン国王の結婚が取り上げられ、AP通信の写真として洋装した18歳の夫人が紹介されている[*Qalam* 1951.3: 20]。ムスリムの写真ばかりではない。第27号(1952年10月)の表紙にはシンガポールを訪問中のイギリス王室のケント公爵夫人(Duchess of Kent)<sup>17)</sup>の写真が掲載された[*Qalam* 1952.10: 1]。

著名人ばかりでなく、社会に進出する一般女性の姿をも『カラム』は活写している。同誌には「婦人のページ(Halaman kaum ibu)」というコーナーがあり、「女性の権利と自由(Hak dan kebebasan perempuan)」という記事が連載されていた。そこには多くの女性の写真が掲載されており、第7号ではインドネシアでイスラム教育を受ける女子学生の写真が紹介された[*Qalam* 1951.2: 36]。第6号(1951年1月)の表紙を飾ったのはエジプトに留学しているスカート姿のインドネシア人女性(イスラム指導者の娘)3人であった。そして、「彼女たちの到着はエジプト人を驚かせた」として、エジプトには女子学生向けの高等教育機関は存在しないこと、インドネシアと違って女性の国会議員が存在しないことなどが紹介された[*Qalam* 1951.1: 2](写真⑬)。

女性の地位は西洋近代とイスラムの相克の一つのテーマでもあった。『カラム』は近代主義的な思想を持っており、社会に進出する女性を描く一方で、過度に西洋化されたムスリム女性に対しては批判的でもあった。第15号ではパキスタンの女性の志願兵の行進が掲載され、「イスラムでこれは許されるのか？」と疑問を呈した[*Qalam* 1951.10: 10]。第18号ではエジプトで洋装する女性の写真がイスラム的でないと



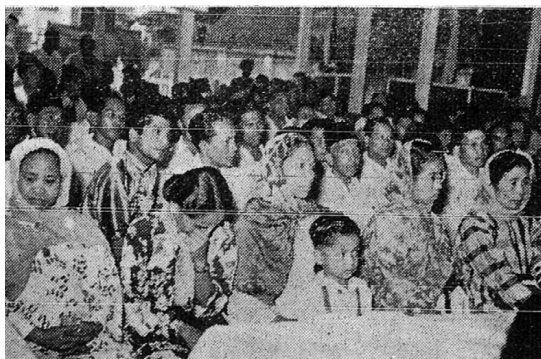
写真⑬

して紹介され、「進歩を性急に追い求めるとこうなるのか!？」と述べられている[*Qalam* 1952.1: 12]。『カラム』の女性観はあくまでイスラムに基づくものであり、西洋近代的な女性像と必ずしも一致するものではなかった。

イスラムと西洋近代の女性像の齟齬を象徴するのが、前述のナドラ事件である。そこでは女性の結婚可能年齢が論争的となった。ナドラは裁判の途中にムスリム男性との結婚を発表したが、彼女が当時13歳であったため、裁判所は結婚を認めなかった。これに関連して、女性の結婚年齢を16歳以上とする法案が提出された。『カラム』は一般裁判所や法律がムスリムの問題を管轄することに反発してこれに反対の立場をとったが、女性の福祉という観点から賛成するムスリムもあり、賛否両論がみられた。『カラム』では、第3号で法案を支持したムスリム女性福祉協会(Malay Women's Welfare Association)会長のザハラ・ヌルモハメド(Zaharah binti Nur Mohamed)を批判し、法案反対派の集会の写真のをのせる一方で[*Qalam* 1950.10: 17-18]、第4号ではザハラが主催した法案に賛成するムスリム女性の集会の写真を(批判的な論調ながら)掲載した[*Qalam* 1950.11: 47]<sup>18)</sup>。

17) ケント公爵夫人マリナ(Marina, 1906-1968)はギリシャ王室の出身で、1934年イギリスのケント公ジョージ(ジョージ5世の息子)と結婚した。夫は第二次大戦中に飛行機事故で死去したが、彼女はイギリス王室の一員としてさまざまな公務を務めた。

18) シンガポールの立法参事会に提出された法案では宗教にかかわらず結婚の最低年齢を定めるものであったが、ムスリムからの反対により、最終的にはムスリムを除外することで決着した[Haja Maideen 2000: 130-134]。



写真⑭

男女の関係も同誌で議論された点であった。第4号のコラム「女性の権利と自由」のなかでは、ジョホールバルにおいてマラヤのマレー民族主義政党・統一マレー人国民組織(UMNO)党首へのダト・オンの復帰を求める行進に多くの女性に参加している写真が掲載された。ここでは男性に率いられた女性として紹介し、「男性の女性に対する責任とは何か」を問いかけている[*Qalam* 1950.11: 14-15]。

第10号(1951年5月)ではイスラムと慣習(アダット)の関係がとりあげられた。シンガポールのマレー・ムスリムのなかにはスマトラ・ミナンカバウ人の移民が多く含まれていたが、彼らのアダット・プルパティ(Adat perpatih)は母系制であり、特に女性への財産の継承に関する慣習がイスラム法と対立するとみなされたためである。エドルスはイスラム法の相続に関する記事を書いたが、そこにシンガポールにおけるアダット・プルパティの改良運動に参加した女性たちの写真が掲載された。そこでは「アダットがイスラム法に反している一つの例である。男女が交わり、女性が前面に出ている。イスラム法は女性の地位を明確に規定している。新たなアダットがあるのに、アダット・プルパティを変えさえすればよいのか?」。次にUMNOのヌグリスンビラン州<sup>19)</sup>ルンバウ支部の婦人部長が男性幹部に挟まれて集会にて話している写真を載せ、男女が交わるアダットを変えようとすると言明したが、男性の間で女性が話すこと自体がイスラムに反しているのではないかと疑問を呈している(写真⑭)[*Qalam* 1951.5: 12-13]。

『カラム』の写真には、時代の潮流を反映して、多くの女性がとりあげられている。ただし、『カラム』は教育を受けて社会に進出する女性は肯定的にとらえてい

るものの、それは西洋近代化とイコールではなく、イスラム教の文脈のなかに女性の地位を位置づけようとしたのである。

## おわりに

本論では、1950年代初頭における『カラム』に掲載された写真を紹介し、その世界観を分析することを試みた。そこからいえることは以下の通りである。

第一に、『カラム』は国際ニュースを中心に全世界で撮影された多様な写真を掲載した。写真の提供元は、欧米の情報機関や通信社、インドネシアやパキスタンの当局、『カラム』の執筆者などさまざまであった。これらの写真は、さまざまな地域で戦争や政治運動がおこった激動の時代を映しだしている。

第二に、それらの写真は『カラム』を発行する東南アジアのイスラム知識人の視点で切り取られたものであり、彼らの世界観がうかがえる。『カラム』の写真は、ヨーロッパの植民地統治からの独立にくわえて、西洋近代がもたらした政治・経済体制からの脱却を目指すムスリムの運動を映した。一方で、冷戦体制下における共産主義への敵意は明らかであり、非イスラム圏の親共産主義的な民族運動には共感を示さなかった。

第三に、『カラム』は国際ニュースや政治指導者のみならず、市井の個人や一般的な景観も多くとりあげており、特に社会に進出する女性に焦点が当てられた。これは、出版業の発展により視角に訴えることが有力になった時代を映し出している。ただし、女性は、イスラム対西洋の構図のなかで、あくまで宗教的な正しさが求められた。『カラム』は、アメリカに代表される近代性への憧憬を示す一方で、過度な西洋化も批判した。女性の地位をめぐる近代主義とイスラムの葛藤は現在にまで続く課題といえる。

本論は、創刊当初の『カラム』における写真の役割を明らかにするための試論である。分析の対象を同誌の発行期間全体まで範囲を広げること、同時期の他の媒体との比較を行うことなどにより、その位置づけをより明確にしていくことが可能になるであろう。

## 参考文献

- Haja Maideen. 2000. *The Nadra Tragedy: The Maria Hertogh Controversy*. Subang Jaya: Planduk Publications.

19) ヌグリスンビラン州はマラヤのなかでもミナンカバウ人移民の多い州であった。



Hamed Mohd Adnan. 2013. *Majalah Melayu Selepas Perang: Editorial, Sirkulasi dan Iklan*. Kuala Lumpur: Penerbit Universiti Malaya.

坪井祐司 2011 「シンガポールのマレー・ムスリムからみたナドラ問題」坪井祐司、山本博之編『『カラム』の時代Ⅱ——マレー・イスラム世界における公共領域の再編』(CIAS Discussion Paper No.19) 京都大学地域研究統合情報センター、pp.17-24。

坪井祐司 2013 「マラヤの独立とシンガポール・ムスリム」坪井祐司・山本博之編『『カラム』の時代Ⅳ——マレー・ムスリムによる言論空間の形成』(CIAS Discussion Paper No.32) 京都大学地域研究統合情報センター、pp.21-27。

山本博之 2002 「資料紹介『カラム』」『上智アジア学』20、pp 259-343。